



Title	【対談】臨床哲学にとって「ともだち」とは
Author(s)	ほんま, なほ; 小西, 真理子
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 209-227
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100175">https://doi.org/10.18910/100175</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【ミニ特集】ともだちについて

## 【対談】臨床哲学にとって「ともだち」とは

ほんまなほ・〔聞き手〕小西真理子

小西：もう6年ぐらい前になりますが、臨床哲学の教員に着任した当初、わたしは臨床哲学というものが何なのか、まったく分かっていない状態でした。しかも、教員という立場でそのなかに入ったというプレッシャーから、臨床哲学のいろいろな痕跡や特徴を手探りで見つけようと必死でした。そのような模索をしていたとき、なかでも印象的だったのが、ほんまさんが〈ともだち〉というキーワードを使いながら臨床哲学について語られていたことでした。何か大切な話をされているように思いつつも、はじめは本当にどのような意味や意図をこめられてこの話をされているのかまったく分かりませんでした。でも、何度か話をおうかがいしているうちに、ほんまさんが話されている意味での〈ともだち〉として他者と関わること、つまり、研究者や専門家として他者と関わるのとは少し違う仕方での関わり方のなかに、臨床哲学のひとつの可能性があるんじゃないかなと思うようになりました。

ほんまさんは、かなり長い期間にわたって〈ともだち〉について話されてきたとのことですし、今でも授業や演習などで〈ともだち〉について話されています。でも、過去から今に至るまで、〈ともだち〉について考えられてきた詳しい経緯やその内容については文字化されていないのではないかということに気づきました。そこで今回は、ほんまさんがどのように臨床哲学と〈ともだち〉について考えてこられたのか、そして、今、考えていらっしゃるのかについて詳しくおうかがいしたいと思っております。よろしくお願いします。

〈ともだち〉をかんがえる、ふたつのルーツ

ほんま：はい、ありがとうございます。ご質問を聞いて、じぶんのなかでふたつのルーツがあることに気がつきました。具体的なルーツからお話しすると、わたしが学校で対話をし、哲学することに2000年ぐらいから関心をもちはじめ、最初は調査をして、やがて、じぶんでもやるようになりました。世界のいろんな地域の学校という場所になされる対話と哲学の試みについて、いろいろ調査しました。『こどものてつがく』という本を、2018年に高橋綾さんと共著で出して、そこに書いたことなんですけど、見聞きした多くの活動は、わたしにとっては不満だったんですね。それは、せまい意味での教育というべきでしょうか、学校教育の一環として哲学とか対話とかをする、学校という枠組みから出るものではなかった。そこに非常に失望しました。1998年に臨床哲学がはじめられたころ、ケアと教育という二つのテーマについて、かんがえることから始めよう、という提案が鷺田さんからあり、教育を論じながら、学校はわたしたちを幸せにするのか？という問いをですね、いろんなひとたちと、ずっとか

んがえてきたわけです。そのなかでもフーコーの『監獄の誕生：監視と処罰』のような理論も読みましたが、やっぱり、学校に関わるっていうことから見えてくることがあるんじゃないか、と臨床哲学の教員と院生たちがですね、学校に関わりはじめました。だから学校でこういう教育をすべきとか、哲学を教えたいというわけではないんですよ。ところが、わたしが関心をもって調べた「こどもたちのための哲学 Philosophy for Children」っていうのは、学校に哲学を導入するという流れがほとんどだったんですね。学校そのものを問うものはほとんどなくて、しかたないので高橋さんとわたしは、「こどものてつがく」と名づけて、こども主体の対話活動をさぐっていきます。そのなかで、アメリカとか、イギリスとか、フランスとかで、覇権的な、学問的覇権を未だにもつヨーロッパ諸国、アメリカ合衆国、そういった「中心」からすると、「周辺」に位置づけられる文化圏、メキシコ、ブラジル、ハワイのひとたちの実践にであいました。中心／周辺という図式をあえて使うと、周辺の実践者たちとの交流が非常におもしろかった。学校じたいをなくすことはできないけれど、西洋中心の知識や体系から作られた、学びや教育のあり方をどうやって問い直していくか、学校現場で問い直していくかという実践が、非常におもしろかったんです。

ハワイのワイキキ小学校では、学校に関わるんだけど、教師ではないひとが学校にいて、生徒や教師といろんなことをしている。それを「フィロソファ・イン・レジデンス」と呼んでいました。「アーティスト・イン・レジデンス」っていうのは、あるコミュニティや行政からアーティストが依頼を受けてある場所を訪れて、そこで人々と関わりあいながら、場合によっては共同で、作品を作る活動のことをいいます。アーティストが単独で作る場合も、つねに対話のプロセスがあるんですね。訪問して関わりをつくり、必要に応じて作品にしたり、作品じゃなくてオープンなイベントを開いたりする。それにならって、ハワイ大学のベンジャミン・ルケイさんは「フィロソファ・イン・レジデンス」といって、学校に日常的に訪問して、関わりをもっていることをする。授業するのは先生で、先生の授業を手伝いはするけど、生徒に並んで参加する先生じゃないっていうポジションだったんですね。それはおもしろい、とおもって。それを学校現場、「フィロソファ・イン・スクール」だけじゃなくて、「フィロソファ・イン・カンパニー」「フィロソファ・イン・ホスピタル」もありうる。もしかしたら「フィロソファ・イン・ファミリー」もあるかもしれない。そういうかたちでその組織のメンバーじゃない訪問者が異邦人として、そこに関わるしかたとして、哲学者の仕事があるっていう考え方はおもしろいなおもいました。じゃ「哲学者」って何だろうかっていう話になりますよね。

かなり前に雑誌『臨床哲学』にわたしが書いた、「哲学者の実践としての〈探究のコミュニティ〉」（『臨床哲学』第14号、pp.16-31, 2012年）という文章のなかで、ハワイのこどもの（ための）てつがくにヒントを得て、「哲学プラクティス」ってこうあるべきなんじゃないか、訪問する、対話をする、いっしょに何かをする、表現する、これら一連の営みのなかに哲学者としてすべき仕事があると書きました。いまも、わたしの大学の授業は、訪問、対話、表現、協働という4つの軸からなるのですが、まず最初の訪問で、外部者で異邦人だけど、訪問先のコミュニティとか組織のひとたちと

まずは知りあって、いろんなことを話して〈ともだち〉になる。訪ね、話しあい、うたったりおどったりして、いっしょになにかをする。そして、〈ともだち〉になる、とかんがえたんですね。それが一つ目のきっかけですね。哲学者は外の人間だし、決して構成員にはならないけども、よい〈ともだち〉になる。〈ともだち〉っていうポジションは、じつは、さっきいったような外部者でも内部者でもない。たんなる異邦人でもないし、ただの訪問者でもなく、家族でも、社員でもない。〈ともだち〉って、毎日会うこともあるけど、1年に1回しか会わない〈ともだち〉とか、数年に1回しか会わない〈ともだち〉とかいるじゃないですか。なんか、そういうひろがりのある言葉で、でも、その久々に会ったら、やっぱり〈ともだち〉に会えてうれしいっていうんですね、そういう情緒的なつながりがある。もちろん、受け入れる側も一時的だけでも居場所を提供する。だから、「アーティスト・イン・レジデンス」みたいな、権威的でおおげさな表現じゃなくて、むしろ、〈ともだち〉になるっていうことが臨床哲学のモデルになるんじゃないかと。

そこから、いろいろかんがえられるんですけど、〈ともだち〉になる、というのは仕事になるかということ、結構むずかしいところで、きょうは、その話はしませんが、臨床哲学をどう仕事にするかって、非常にむずかしい問題なんですよ。たとえば、「プロのともだち」って、じゃどういうこと？ってなる。

むかし、小学校でよくこどもたちと話しあった、『ともだちや』っていう絵本があります。知ってますか？「ともだちからお金取るのか？」ってね、くまに怒られるんですね、狐が。でも、それはね、やはりおもしろい問いだとおもいます。「ともだちからお金を取るのか」をめぐって、その絵本はノーっていう答えなんだけども、これは、なんかね、哲学的な問いだとおもうんですよね。これはセックスワーク論につながるっていうか、だれかと親密になるお仕事をして、それで対価を得るということは本当に問題なのか、ってとても大切な問いだとおもいますが、置いときましょう。(ちなみに、哲学相談所を開設した哲学カウンセラーに対して、哲学で金儲けなんて魂の売春だ！と哲学研究者から批判があった、と聞きました。でもこれって、セックスワーク差別ですよ？)臨床哲学が仕事として一本立ちするかどうか別として、哲学の、あるいは哲学者の働きかた、社会でのありかた、かな？、金銭的な対価を得るかどうかは別として、〈ともだちになる〉というのは、ひとつの働きかた、もしくは生きかただとおもうんですね。これは哲学の原点でもあり、もういちど、哲学者とはだれか、をかんがえなおす出発点だとおもうんです。

小西：たしかに、〈ともだち〉になることが、仕事になるか、むずかしいところですね…。ところで、もうひとつのルーツとは、なんだったんでしょうか？

ほんま：ふたつめのルーツなんですけども、語源というより、ある意味、むしろ現代になってからの、こじつけに近いものですけど、「フィロソフィ」という、ギリシャ由来の外国語を日本語にどう翻訳するかって、授業でもよく話します。漢字文化圏以外では翻訳しないんです。音を借りてきて、ピロソピーとか、フィロソフィとか。フラ

ンスもそうだし、ドイツもそうですよね。(古代)ギリシャ語では「フィロソフィア」です。日本は、不幸にも、「哲学」って訳してしまった。「哲学」っていう漢字から何をおもいうかべますか？

小西：何というか、むずかしい、賢そうな学びや学問というイメージがありますね。

ほんま：そう、哲学の「哲」って「賢い」って意味ですよ。賢い人ってことですよ。その「哲」っていう賢い先人達に「学」がついてるじゃないですか。フィロソフィって、すごくステキなことばがあるのに。ソフィアは知恵っていう意味じゃないですか。わたし知識より、知恵だっておもうんですけど、「フィロソフィ」は「知恵を愛する」といわれますが、フィリア(動詞は「フィレイン」、形容詞は「フィロス」=「親愛なる」)って、「エロス」の合一でもないし、「アガペー」の愛とちがう。フィリアっていうのは、親しさ、友愛の話ですよ。だから、日本語で簡単にいうと、知恵の友、知恵と〈ともだち〉になること。この表現はおもしろいじゃないですか？ 知恵を愛する、っていうのと、だいぶ印象がちがいますよね？

小西：わたしもおそらく学部生時代には、哲学、つまりフィロソフィの語源は、「知を愛する」であると教えられていたような印象があります。その知が知識なのか知恵なのかということまで深く踏み込んだ話を聞いた記憶はなくて、単純に「哲学とは知を愛することなんだ」といったんは理解するような教育を受けてきました。少なくともわたし自身がそこを問おうとしたことはなかったです。そして、「愛」の対象が「ともだち」となる「友愛」といえば、真っ先に浮かぶのはアリストテレスです。では、アリストテレスが語る友愛、つまり、フィリアが、臨床哲学研究室で耳にした〈ともだち〉と一致するかということ、わたしにはそのようには聞こえませんでした。ここにあるちがいは何なののでしょうか。

〈知恵〉と〈ともだち〉になる

ほんま：知を愛するひと、といえば、科学者もそうじゃないですか。マニアもそうだし、博士とかも、知恵を愛するひとですよ。好奇心はだれでももっているし、ある意味、だれもが知を愛している。だれもが知者だといえる。でも、知者にケンカを売ったのはソクラテスじゃないですか。だから知を愛するというのは、ふつうっぽい。ここから先はこじつけになりますが、知恵と〈ともだち〉になるということは、「知恵」と「わたし」のあいだに「と」があって、一体化するんじゃない。なんでも知ってる、知識を吸収し、蓄積するひとになるのではなくって、〈知恵〉〈と〉〈ともだち〉になるんですよ。おもしろくないですか？

じぶんの経験でわかりやすくとえると、わたし、音楽が大好きなんですけど、音楽家、ミュージシャンとは、音楽または音と〈ともだち〉になるひとだとおもうんですね。音はけっしてわたしのものではない。そこにはかならず距離があって一体化はしない

んです。でないと、演奏は不可能ですし、もし、音楽がだれか個人の持ち物だったり、からだそのものだったりすると、音はともにあじわえなくなってしまう。音楽はあいだにひびく音であり、わたしと小西さんのあいだで音がひびいたとしても、決してわたしのものにならない。共通体験というか、鷺田さん（『「聴く」ことの力』）のことばを使ったら「共時的（シンクロニック）」な関係や体験であるから、音楽は出来事であって、決してわたしのものにならない。けれども、わたしのものじゃないものと〈ともだち〉になることはできる、そういう技術として音楽があるとおもうんですね。音と〈ともだち〉になる、そういうふうには、鳥の声と〈ともだち〉になることから音楽がはじまった、とおもうんです。鳥が囀ることが、ひとつの知恵であるとして、それにどのようにわたしが関係するか。だから知恵との関係がたいせつだと。ちなみに、この「知恵との関係」っていったのは、ブラジルの貧しい子どもたちとてつがくする、オマール・コーハンさん、という哲学者であり、〈ともだち〉です。「フィロソフィとは知恵との関係だ」と彼から聞いて、やっぱりそうかとおもった。子どもにもわかりやすいでしょう、「数とおともだちになる」とか。

〈ともだち〉といっても、〈ともだち〉を嫌いになってもいい。だって、嫌いになる〈ともだち〉もいるから、離れたりする可能性もあって、べったり愛好するんじゃなくて、音楽にしたって、数学にしたって、「わたし、11とか、素数が大好きなんです」とか、あってもいいんですよ。「割り切れない数字がキライ」「偶数は好き奇数はキライ」とかあっていいと思うんですよ。嫌いなもの好きなものって、嫌いなともだち、好きなともだちって、なんで嫌いとかかなんで好きとか、そこから関わりや探究がはじまるわけじゃないですか。だから、ここでいう〈ともだち〉は家族じゃない。狭い意味での家族、血縁関係で結ばれて、けっしてそこからじぶんは自由になることはできないような束縛のような家族じゃなくて、自分が能動的に関係を結んだり、結びなおしたり、というように、離れて、結びなおすもの、〈ともだち〉の関係ってそこだとおもうんですね。だから家族も、きょうだいだったり、こどもだったり、親だって、わたしは〈ともだち〉になれるとおもうんです。関係を結びなおす力っていうのが、〈ともだち〉だとおもうんです。

小西：臨床哲学の〈ともだち〉という言葉は、わたしは（好き嫌いでいったら好きのみという）ポジティブな感情のみが湧いてくるような言葉として受けとめていたところがありました。それは確かにすごく狭い捉え方ですよ。「好き嫌い」が同時にあらわれてくることなんて、世界の至る所で起っていることです。わたし個人は「好き嫌い」を通じて結びなおしがポジティブに成立しないものもあってもよいように思っていますけれど、そんな関係も「世界」っていう視点からするとつながっているとか結びなおされていますよね。同じ場所に生きているので。同時に、わたしは関係修復にもずっと関心をもってきましたので、そういう関係修復のあり方と〈ともだち〉がどういう関係にあるのかはもっと知りたいところです。

ところで、他にも今の話を聞いていておもしろいと思ったのは、ほんまさんが〈ともだち〉について、〈ひと〉と〈ひと〉との関係にとどまらない、音楽や数との関係で

語られたことです。近年、大阪大学の倫理学（学部）や臨床哲学（大学院）では、ひと、あるいは、ひととの関係を中心に据えたものとしての倫理や哲学が問われている流れがあると思います。〈ひと〉が強調されている。そんな現在の臨床哲学のあり方と、いまお話しされた〈ともだち〉の接合点について、思想的あるいは経験的なものとして、お話をいただけますか。

ほんま：わたしが話した〈ともだち〉は「なかよし」とか、「なかなおり」という意味とは、ちがうんです。それはあとでお話ししますね。すこし、話はひろがるんですが、臨床哲学っていっても、「先代」っていいかたをしていいのかな？「いいだしっぺ」の先人たちは、わたしが話したようなことは、いっさい教えてくれなくて、「とにかく現場にたつ」というばかりで、すごく困りました。現場に行って何をしたらいいの？何者としてそこにいたらいいの？基本的に臨床心理士だったらカウンセラー、医師だったら医師、家族だったら母とか、そういう役割を通して関わるじゃないですか。そこでいったい、じぶんたちは何者としてそこにいるのか、わたしの同期たちは全員めっちゃ苦しんだんですね。本とか、理論を相手にするのではなくて、〈ひと〉を相手にする。しかも、技術や役割なしで。それを、みんなでかんがえました。でも、その苦しみをあじわえたのはよかったですね。教えられるのじゃなくて、じぶんでかんがえる経験ができたことが、わたしにはラッキーだったとおもいますね。もしこの話を大学院生とか臨床哲学に関心のあるひとが聞いてくれているとしたら、ぜひ悩んでください。

#### おもい悩む修行としての臨床哲学

小西：そうですね、それはわたしもそう思います。形は違いますが、わたしも、自分の抱える研究テーマに関して「もっと悩む」「もっと苦しむ」ということが推奨されるような大学院生活を送っていました。相手から答えを渡されてしまうと、それ以上のものがじぶんから出てくることはありません。そもそもわたしは、少なくとも研究という営みにおいては、相手から渡されるものをそのまま実行するというのをまったく好みません。ある物事を見様見真似でやってみたり、ある場所に飛び込んでみたりするなかで、試行錯誤して苦しんで、そうして自分で考えてじぶんなりのやり方で何かを生み出すということの方が、圧倒的におもしろい。そのやり方の方が、おもしろくて深みのあるものが出てくる。世界にはまったく同じひとなんて一人もいないから、そのひとならではのものが絶対にそのひとのなかにはある。だから、みんな自分のかけがえのなさを信じて物事に取り組んでほしいと、本心では思っていますね。

もちろん、そのかけがえのなさに出会う道のりは相当な苦しみと忍耐を必要とするものだと思います。考えることに苦しみすぎて潰れてしまうという状態の方があきたりのことのように長年観察してきましたので、全員にそのことを推奨することを、わたしはどうしても難しく感じてしまいます。ケアの倫理で著名なネル・ノディングスの著書『ケアリング』において、わたし自身ももっとも共感できた箇所のひとつは、自分に課せる要求を他者に課すことができないという事態が読み取れる部分でした。

わたしは「人生は修行である」と思って生きています。何度も何度も限界にぶち当たってきたと認識していますが、自分で定めた限界に接しえたからこそ、それを越えることができ、より美しく豊かな世界を見ることができるようではないでしょうか。やっぱり、悩んだ先にある世界って、すごく美しいものなんじゃないかな。そういう景色をいっしょに見られるひとや、同じ世界をまなざすことができるひとがいるとなおさらそうなんじゃないかなって思いますね。でも、このような修行のあり方を、他のひとにはどうしても勧められないんですね。痛んでも続けられる、痛んでも這い上がってこれるって、それもひとつの恵まれたパーソナリティなんじゃないかって思って、悩んでしまいますね。それは、相手を信じていないというレベルの話ではないと思います。ほんまさんもきっと、痛んでも続けられる、続けられる仕方や状態を見つけられてその場所に自分をもっていける、そういうことができるひとなんじゃないかなって思います。

いずれにせよ、わたしは臨床哲学を貫くということ、しかもそれでじぶんの場所を確立していくということは、生半可な気持ちと努力でできることではないと思っています。現在でさえ、それを実践しようとする、とくに若いひとたちは複雑で難解で困難な状況に直面してしまうのではないのでしょうか。でも、おそらく現在よりも、臨床哲学がつくられた当初の方がよっぽどそういう側面が強かったのではないかと想像します。もちろん、そういう状況を逆に楽しめるひとたちがいらっしやったから、いまも各地に臨床哲学が存在しているのだと思うのですが。臨床哲学が作られた当初に、ほんまさんが経験された試行錯誤について、もう少しお伺いしてもいいですか。

ほんま：そうですね、まず、わたしが「悩む」というとき、そこには、いまいわれたような「苦しみ」や「痛み」はふくまれていません。「ポジティブ」か「ネガティブ」か、というの、文脈や状況、時間や歴史のなかの位置どりによってちがってくるし、変化もするので、わたしは重視していません。わたしは、悩んでほしい、とはおもうけど、「苦しみなさい」とはぜったいにいいません。むしろ、探求する、より正確には、ともに探求、探究する、という意味でいっています。ただ、いまここで話しているのは、わたしなりの答えなので、それをとらなくていいし、中岡さんがかつていわれていたように、臨床哲学は複数であっていいのだから、わたしの臨床哲学と、小西さんの臨床哲学、そしてこれからの臨床哲学がちがっていていい、とおもいます。

臨床哲学がつくられた当初から、臨床哲学は、経験科学でも社会科学でもない、カウンセラーじゃない、人類学者じゃない、べつの可能性をさぐる必要がありました。その意味で、臨床哲学では、「フィールドワーク」ということばを、できるだけ使ってほしくない、とかんがえています。哲学は、調査、社会調査といった対象知、対象化ではないんです。「フィールドワーク」っていうのは、人文学者が図書館に閉じこもって文献に埋もれるのではなく、野外で仕事するっていう、なんか貴族的な学問をしているひとが、外に出て放浪する、そして帰ってくる、という響きがあって、わたしからすると、差別的（自文化中心主義的）なことをいっているように聞こえるんですね。そうじゃないだろう、と。だからわたしは「訪問」というんです。訪問はヘタすれば、

拒絶されるかもしれない。それもすごくだいじだとおもうんですね。なぜ拒絶されたのか、かんがえなければならぬ。わたしも拒絶されたことがあります。わたしは初期の臨床哲学のころ、病院に関わっていったとき、すごく煙たがられました。ぜんぜん、ことばが通じなくて。そういう経験はすごく痛々しい記憶として残っていますが、すごくだいじだとおもいます。そのころに関りをもった看護師さんたちといまも、つきあいがありますが、そのひとたちのいうことを、わたしはちゃんと聞いていたのかと、かんがえますよね。そのような拒絶される経験を含めて、このひとたちの話していることばを、もういちど学び直そう、学校現場もそうだし、教育もそうだし、医療もそうだし、そのなかで、ひとのことばを学ぶことを始めていった。そうすると、じゃ次は、人類学者のようにフィールドノートを作って、理論化して、ということなのか？わたしはそうではない、とおもったわけです。そこで使われていることばとか、じぶんの経験を、観察者として書いたりそれをデータや資料にするのではなくて、訪問して、話しあいをして、いっしょに見たり、きいたり、食べたり、いっしょになにかをする。いっしょにする、というのはだいじとおもうんです。〈ともだち〉って、この〈いっしょになにかをする〉ってということなんですね。

ちっちゃなイベント、出来事でいいので、いっしょになにかやろう、どうしようか、と探求するわけです。阪大のすぐ近くに、池田高校ってあるんですけど、その倫理の先生から倫理の授業に関わってくださいっていわれて、高校倫理のなかで対話の時間を作ってもらって話をしました。でも、それはあくまでも授業のお手伝いであって、それを続けているうちに、高校生がこの授業でやってるようなことを学校の文化祭で出し物にしたい、っていいだして、じゃ何をしようかって大学生もまじって話しあった。いろいろ話しあって、「おしゃべり哲学」っていうのを始めたんですね。そのときに初めて、わたしはいっしょになにかをした。高校の倫理の先生のお手伝いとして、大学の教員として入ってるところから、一歩進んで、その授業受けた人たちがこの時間がおもしろいから、じぶんたちで出し物にしたい、となって、一日だけのちっちゃなイベントでしたけども、いっしょにやったんです。（この「おしゃべり哲学」は、その後も数年にわたって放課後につづけられた。）そのとき、わたしは高校生と〈ともだち〉になれた。そういう経験のことですね。なんかそれって、論文にもならないし、研究にもならないんだけども、でも、ひとつのフィロソフィカルな生きかたに、なるんじゃないかと。それをどう職業にするかとか、研究成果にするかは、またちがう話なので、いつか話したいとおもいます。

### 〈ともだち〉になっていくプロセス

小西：ふたつ気になったことがあります。ひとつは〈ともだち〉になっていくプロセスに関してです。ある場所にはじめて訪問したとき、そこではじめて出会う人とはその瞬間においては決して〈ともだち〉関係ではないと思います。でも、少しずつ時間をかけて一緒に何かを共有できるようになっていくことで、広い意味での〈ともだち〉になっていくのだと大きくは理解しました。ほんまさんはいろんなアーティストの方々

などと訪問を通じて関わっていらっしゃって、そこで〈ともだち〉関係が作り上げられていくのだと思うんですけども、その関係ははじめから〈ともだち〉だったひとたち、つまり、訪問という仕方ではなく、学校やイベントやバイト先などを通じて〈ともだち〉になった人たちとの関係と同じものなのではないでしょうか。訪問を介した関係と、そうではない〈ともだち〉には何か違いがあるのか、それともそのようなちがいはほとんどないのかということをお教えください。

もうひとつは単純な質問です。ほんまさんは大阪大学の授業の多くを二人以上の教員からなる共同授業として受けもたれています。その共同授業のパートナーに当たる人のなかには、訪問を通じて知り合われた方が多いのでしょうか。

ほんま：基本そうですね。わたしにとって、授業は、たんなる授業ではなく、受講者もふくめて、〈ともに生きる〉ことをていねいに積みかさねる、ひとつのたいせつな現場です。哲学とは、話す、聴く、関係する、ともだちである、ごくふつうのことを、ていねいに生きなおす営みで、授業の場もそうです。そして、訪問先で〈ともだち〉となったひとたちと、そのような〈ともに生きる〉現場をつないでいく、ということが、わたしが大学でしている仕事です。

小西：訪問で知り合って、〈ともだち〉になって、その次はいっしょに授業をするという段階になってくるということでしょうか。それは、訪問先で「文化祭で何かやりましょう」となっていっしょに何かするという話と重なることなのではないでしょうか。ひとつめの質問に戻りますが、その関係は、日常で知りあった「ともだち」と何か違うものなのですか。

わたし自身の話をしてしまうと、わたしはこの両者の「ともだち」は突きつめていけば重なるもののおもっています。たとえば、わたしはインタビューを元々〈ともだち〉だった人にしたことが何度かあります。特にその〈ともだち〉と信頼関係が築き上げられているとき、その関係間での会話だからこそ相手も話せるし、わたし自身も話を聞くことができるという空間が形成されます。わたしはインタビュー、あるいは、聞き取りの理想型を、そのような信頼関係からなるやり取りに見出していて、その関係のひとつが〈ともだち〉関係であると思っています。〈ともだち〉のあいだでされるやり取りは、今日初めて会った人とはできないものだと思います。あまりよく知らないひとにだからこそ話せる話というものもあるかとおもいますが、聞き手としてわたしが大切だと思っているのは、これまでの関係で知ることになった、おびたしい相手に対する情報の破片を紡ぎながら話を聞くことです。初対面のひとに対しては、紡ぐほどの破片を持ち合わせていないので、そのひとの話を聞く準備ができていない。それは相手の深みを聞き取るということだけでなく、ある話以上の話は（今は）聞かないという判断にもかかわることだと思います。あと、理想的な傾聴は、相手がわたしを好意的に思ってくれているかはもちろんのこと、わたし自身も相手に好意的な感情を抱いていないと成り立たないもののおもっています。

もちろん、そういう感情がなくてもインタビュー調査はできるとおもいますし、そ

ういう聞き取りをしたこともありますけれど、そのときは充実度が異なるというか、まったく別の行為をしているように感じます。でも、はじめから〈ともだち〉だったわけではないひとに対する聞き取りが、はじめから信頼関係を築いていた〈ともだち〉に対する聞き取りと同じような領域に向かうことがないかと言えば、必ずしもそうではないという実感があります。

ほんま：ひとつめが、普通にいう「ともだち」と、わたしが訪問して対話していっしょに何かする〈ともだち〉とどうちがうのかっていうことですよ。ふたつめが、ある種の研究手法としてじぶんの調査対象のひとと、まずはともだちになって、ともだちの関係になれるからこそ、より深い研究ができるということとおもったわけですよ。「研究」とは何かって、学問の歴史の話でもあり、なかなかむずかしくて、それについておもうことはたくさんあって機会があれば書きたいんですけど、ひとつめの方から答えると、わたしはひとりの哲学者として〈ともだち〉という概念をもっと探究したいとおもってます。ひとが何気なく使ってる「ともだち」の意味もありながら、実はそこにすごく豊かな本来的な知恵みたいなものが、〈ともだちになる〉ことにあるんじゃないか。そのような、ひとつの哲学をかんがえています。ふつうにいう「ともだち」と種類がちがうのではなくて、〈ともだち〉というその関係のありかたを、ことさら、ていねいに、たんねんにやる、あるいは、やりなおす、とっていいかもしれませぬ。むしろ〈ともだちする〉といったほうがいい。哲学とは、あたらしいことばや概念をつくったり、定義したり、操作したりするのではなくて（それは知識の操作であり、生産です）、いま目のまえにあり、手にしているものを、きちんとあじわったり、感じなおしたりすることであり、むしろ、ことばや思考はそれをジャマすることさえある、といえます。哲学とは、近代の大学において研究であるまえに、実践であり、日々の行いであった、ということにたちもどるべきだとおもいます。

いまは、そのことに深入りしないで、ふたつめの研究との関係でいうと、わたし個人の意見、意見というより批判点なんですけども、科学、とりわけ、「質的研究」といわれる社会科学（あるいは、社会改良的な）アプローチと臨床哲学がどうちがうのか、この線の引きかたがだいじだとおもいます。ところで、また話がとびますが、これを読まれるみなさんには、臨床哲学では、他者に関わっていくこと、つまり、じぶんのことを研究するのではなくて、じぶんの悩みを共有する他者でもいいので、他者に関わっていくことがなにより求められる、ということをお伝えしたいのです。なぜかっていうと、フィロソフィは〈ともに生きる〉という実践そのものだとおもうからです。

たとえば、いま、かんがえたいことがあったとして、なんでもいいですが、学生さんがかんがえたいことがあったとします。それをすぐに「インタビューしたい」って、その学生さんがいうとするじゃないですか。「いや、それはちょっと待ってくれる？

インタビューっていうのは社会調査だし、社会調査はいろんなね、同意書を取るとか、データを保管方法とか、プライバシーの保護とか、いろんな倫理的配慮をすとか、いろいろ手続きは必要で、それはそれで学ばないといけないし、社会調査の手法をじ

ぶんで学ぶのはオッケーだけど、それをやるのが本当に臨床哲学ですか？」っていう話になります。わたしならば、「ある事柄やことばに関わるひとびとについて何かを知りたいとおもったら、いきなり「研究させてください」とか、「インタビューさせてください」じゃなくて、さきほど話したように、訪問して話をして、時間をかけて〈ともだち〉になってから、いっしょにかんがえるのでも遅くないよ」といいます。

### 研究と研究者のありかたをめぐる

ほんま：「研究対象」として切り取られる立場としても、聞き取る、切り取る研究者の立場としても、非常に厄介な問題ですが、研究というのは、よく切れる刀であると同時に、切ることによって関係を切り裂くというか、責任が生じます。研究という制度はよくできてるんだけど、うまく使わないといけない。社会科学にもいろいろあるのはわかったうえで、いま大雑把にいうなら、社会科学の方法は、切る、切り取ることだとおもいます。研究者という立場から、「こうすべき」というのがあるわけですね。だから研究の倫理も求められる。ただ、研究というより学問がそこに留まってしまうと、もったいない。そこを踏み越えるベクトルが必要で、臨床哲学はその危険、リスクを冒して、超えていいんじゃないかとおもうんですね。さきほど、小西さんがいわれたのは、そこだとおもうんですよ。本来は望ましくないけれども、そこにあえて踏み込む、博打を打つようなものだとおもうんですよ。だってそれって、信頼できる関係にまで到達できたらいいけど、できなかつたら破産しますよね。書けなくなりますね。いわゆるフィールド調査として関わったけれども、そういうことになっちゃうこともある。だから、やっぱりそこは研究として割り切る方向、西村高宏さんが最近よく使われる「割り切る」方向じゃなくて、そこは「割り切らない」「割り切れない」方向ってあるんじゃないかなとおもうんですね。たとえば、ここはやっぱり〈ともだち〉の関係を優先させて、あえて「研究」にはしない、研究以外の関わりをもつ、という選択肢をじぶんたちにとっておくっていうのは、臨床哲学なんじゃないかなとおもいます。その点では、「競争的資金」を調達して、はやく「成果」を出さなければいけないひとにとって、研究にならないってことはリスクでしかないの、もちろん勧めません。ちなみに昨今の大学では、研究職だけでなく、さまざまな働きをするポジションが模索されています。ある意味では、わたしのいるポジションもそういえるでしょう。いま、わたしがいいたいのは、「職業としての研究者」になれるかなれないか、その競争のはなしではなくて、哲学に限定すると、研究よりも〈ひととひとの関係〉を重視するのが、ほんとの哲学であり、対話だとおもう。研究よりも、このひとといっしょに生きていきたい、っていうことの方がだいじだとおもいます。

小西：なるほど。わたしの研究をめぐる関心からしても、聞きたいことがかなり出てきてしまっています。いまおっしゃられたように、〈ともだち〉というあり方を追求するということは、ある意味博打というか、リスクがすごく伴いますよね。そのリスクにもいくつかの種類があると思います。ひとつは、最後に少しふれられていました、

職業としての研究者になるには、ある程度の「適切な業績」を積まないといけないという風潮が根深く存在することです。たとえば、わたしはすでに大阪大学で常勤の研究職を得ていますので、その後は「就職のために必要な業績」については一切気にせず、自由なあり方でインタビューや研究をすることができます。調査を通じて知り合った人と〈ともだち〉になるための時間は充分にあるし、わたしにとってそれは楽しいことだから、それがリスクにさえなりません。

わたしという自己のうち、職業研究者でもあるという側面を切り取るならば、わたしにはどうしても研究業界のサバイバーであるという認識がぬぐうことができないんです。いわゆるサバイバーズギルド、西村さんのご著書『震災に臨む』でいう「負い目」をぬぐえないということです。わたしはただただ研究がしたくて、研究し続けることが可能になる環境を手にいれただけでした。誰かと比較して競争するということはできるだけ避けたかった。でも、職業研究者とは別の自分が生きている日常をあきらめることなく研究し続けることを可能にする環境を手にいれようとしたときに、研究業界の競争に取り込まれてしまった実感はありました。そもそも業界の構造を考慮すれば、いくつかのポイントで、わたしは複数の他者と競争し、勝利を手にしてきたと解釈されることから逃げ出すことはできません。大学の教員職に就けたことだってそうです。そういう「負い目」があるなかで、「賭博性があったとしてもいいじゃない」と思ったときに、「特権的なあなたはそれでいいけれど、非正規の自分たちはそんなこと言っていられないんだ」と訴える内なる声が否応なく聞こえてきて、どうしても悩まされてしまいます。

もうひとつとても大切なこととして、〈ともだち〉関係は、多くの場合は調査者・被調査者との関係一般よりも密で、両者間の線引きが緩いものではないかということがあります。ほんまさんは対談のはじめで、〈ともだち〉関係は一体化をとまなうものではないとおっしゃいましたが、それでもその関係は少なくとも、ビジネスライクではないと思います。とくにわたしが研究する内容は、トラウマや生きにくさなど、非常にセンシティブな領域に踏み込むものです。だからこそ、調査者・被調査者という割り切った線引きが存在しないことは、自他の境界を超えて互いの傷に触れてしまうような恐れを引き起こします。少なくともわたしは、これまでのインタビューでひとびとの傷に何度か触れてきました。そこで自他が重なるような行為は、研究者は決してしてはいけないことです。でも、そういうことが起りかねないという状態に〈ともだち〉という関係は近づいてしまうのではないかと感じています。そういう意味で賭博性が高くリスクです。でも、そういう意味での〈ともだち〉関係だからこそ引き出される対話もあります。

わたしが〈ともだち〉関係のリスクということを考えたときに思い浮かぶのは、これらふたつのことです。

ほんま：小西さんは、臨床哲学の教員になられるまでは、研究者になることを目指されてきたとおもいます。その点については、まず大前提として、日本の高等教育のありかたが変わらなければならないし、変わりつつある、ということを確認しておきた

いとおもいます。かつて、『臨床哲学ニューズレター』に書いた「臨床哲学からフィロソフィへ」のなかで、鷺田さん、中岡さんは、社会のなかの働きかたとして臨床哲学を唱えられた、という点を強調しました。わたしも、臨床哲学とは、あたらしい研究者や研究職をつくり、そこに向けてひとを養成することが目的ではなく、哲学、わたしは「てつがく」とひらがなで書きますが、ひろく社会のなかで〈てつがくする〉ことの探求だ、と受けとめています。もちろん、ここはたいせつな点ですが、大学も社会のなかにあるわけですから、大学のなかで〈てつがくする〉、それもじぶんひとりじゃなくて、教職員学生、訪問者など、いろんなひとたちと〈ともにてつがくする〉こともあっていいわけですし、主としてわたしの仕事は、研究ではなく、社会のなかで〈てつがくする〉ひとをつなげることだ、とおもっています。ですから、ひとりの大学人として、研究以外の大学のそとのひととのつながりとしても、〈ともだち〉というありかたが、おおきなヒントになる、とかんがえています。修士号や博士号をもつひとたちが、研究職以外で、どのような役割をになっていくのが、まさに問われているいまだからこそ、です。

実際的な話になりますが、研究職につく、つかない、現場に行く、いかない、を問わず、知っておくべきこと、学ぶべきことはたくさんあります。〈ともだちになる〉ためではなく、これから〈ともだちになる〉かもしれないひとたちの置かれている歴史・社会的な状況について、これまで話されたり、書かれたりしていることについて、知っておくべきです。これは研究するかしないか、にかかわりなく、そうだとおもいます。研究する場合も、〈ともだち〉になる、ならない、に関わらず、知っておくべきことは、やまほどある。そうすると、なにが研究されていて、なにが研究されていないかも、おのずとわかびあがってきます。

「就職のために必要な業績」については、本来的には、人事担当者の見る目の問題だろうとおもいます。ある研究者業界で高く評価されている論文が、ほんとうに価値のあるものなのか、しかも、分野という枠をこえて社会という視野のなかでそれをちゃんと見抜ける目を、あるいは、嗅覚や触覚をもった研究者が、どれだけいるのでしょうか？ わたしは、日本の大学と高等教育はまさにそれが問われているとかんがえています。

阪大でいえば、文学部から大学院進学するひとは、1割に満たないでしょう。にもかかわらず、教員は大学院進学のための教育しかしていない。高等教育の大衆化がおきて50～60年以上たつのに、のこりの9割のひとたちのことをかんがえない。それは教育者として無責任です。また、若手研究者の問題についても、大学は国家予算のなかでの教育研究費の大幅な削減と、それによる教員ポストの減少から生じる課題を真剣に考慮もせず、すくないポストをめぐる熾烈な競争にさらさせる、という構造的な不正義としかいいようのないことを放置しています。ほとんど災害といってもいい。にもかかわらず、人文系の大学教員はじぶんの専門を守ることしかしませんよね。小西さんがいまいわれたことは、個人的な「罪責感」として認識すべきではなく、社会的な責任として議論すべきでしょう。

人文学に関していえば、科学論文のような競争原理がなじまないからこそ、大学のそとの社会における人文学のありかたに、ていねいに向きあい、応えるべきだとかん

がえます。だから、研究一本槍じゃなくて、多様な経験をもつひとたちが、もっと教員になっていい。その場合、やはり、ひとりよがりではなく、〈いっしょにする〉ことがたいせつになる。研究に関しても、じぶんが本当にやりたいこと、それに関しては研究にしない、ならないこともおおいにありうる、五分五分だとおもってやることの方が、おそらくは本当に世のなかのための研究になるんじゃないでしょうか。

## 研究者としての葛藤

小西：わたしは研究者業界で生きてきたこともあり、研究者たちがわたしにとっての〈ともだち〉でもあるということも強調しておきたいと思います。だからこそ厳しいことを言い合える関係でもあるわけですが、「みんながそうする」哲学スタイルで研究しているように見えるひとたちのなかに、そのひとの実存を賭けた営みが潜んでいたのを目撃したことだってあるわけですね。わたし自身だってそうです。研究の中身はともかく、わたしの表面的な研究キャリア形成は、大変適切とされる手続きを網羅したものになっています。でも、わたしは「みんながそうする」からそれを実行したわけではありません。だからこそ、臨床哲学が批判すべき研究者に見えるひとたちを、ただちに否定できない。それが検討違いのものである可能性を捨てきれないんです。裏を返せば、そういうふうに思わせてくれた王道の哲学研究者の〈ともだち〉たちが、わたしの研究キャリアの初期に存在したということですね。

誤解を生まないために付け加えておきますと、「みんながそうする」哲学スタイルに甘んじている業界の強者はたくさんいると思っています。その人たちにとって、現在根深く定着しているスタイルと相性のよい制度の維持は、自分の特権性を高めたり、自分がやってきたことの正しさを裏付けたりすることにつながりますよね。変革の難しさがこういうところに出現すると考えています。

ほんま：研究者のあいだでも、いや、あいだだからこそ、敵か味方か、勝者になるか敗者になるか、という競争ではなく、〈ともだち〉として、ともにかんがえることのできる場が必要だ、ということになるのでしょうか。わたしは、研究者としての「生き残り」をかけて生存闘争することが、ほんとうに学問の発展につながるとはおもえません。わたしたちは、本来、学問や研究がそうあるべきところとは、まったくべつの土俵で、リアリティ番組のように生死をかけた闘争を強いられる、といえるのでしょうか。そこには、わたしのおもう〈ともだち〉はうまれません。

小西：話を戻します。調査が行われるとき、それがたとえ〈ともだち〉関係を深めるような訪問であったとしても、大学関係者が訪問してきたときに、何か自分たちにとって役に立つ貢献をしてくれるんじゃないかというひとつの期待が生まれる可能性があることに歯がゆさを感じることがあります。研究者には関わらないでほしいという人たちがいる一方で、大学関係者が所持しているある種の権力に期待みたいなものを抱く人もいます。そのようなことについてどう考えますか。

ほんま：やっぱり、社会における大学関係者や研究者の役割をもっと広くとるべきだとおもいます。さきほどいったように、〈ともだち〉に関して「知るべきこと」は、やまほどありますから、資料の翻訳もそうですけど、誰でもできる仕事は順番でやったらいいし、それも仕事になるとおもいます。知識を紹介するとか、解説するとか、ひとに伝えるとか、やればいいし、わたしもやってます。それとは別に、大学関係者や研究者の役割については、もっと広い意味や別の可能性があるはずですよ。なのに、特定の決められたことを決められた通りにする官僚のような研究者ばかりです。研究ってお作法やルールがあるので、それは必要悪というか、お金のためというか、職業として成り立つための必要にみえるけれども、けっしてそこに切り縮められてはならない。あるいは、そのルールさえ守っていけばなにをしてもよい、ということにはならない。そこについて、わたしはすごく危機感をもってますね。論文、とりわけ哲学の論文は、本来はもっと多様な形態や可能性をもつはずなのに、査読やジャーナル制度はそれ許さない検閲的な方向に進んでいる。それは結果として、研究の発展を阻害するんじゃないかとおもっています。

ちょっと話がそれるかもしれませんが、「遊び人」っていうか、社会のなかで異邦人的っていうか、常に半分コミットして半分コミットしないような、絶妙な立場を研究者は取れるんですよ。だから家族にはならない、〈ともだち〉になっても家族にはならない、あるいは組織やコミュニティの一部にはならない、そういう、どっちもつかずの遊びのあるポジションにある。日本語の「遊び」には、きっちり固定せずに、ちょっと緩みをもっている、という意味がありますよね。その点からすると、わたしのいう〈ともだち〉とは、カール・シュミットがいうような、敵か味方か、のような二者択一ではなく、あるところでは敵を愛し、味方を批判する、敵味方を横断する関係のことをさしています。

日本の倫理学者のなかで、わたしが本当にいい仕事したなとおもうひとたちは、驚田さんをふくめて、ちゃんと遊べるひとだったんですね。やらないといけない仕事、ドイツ、フランス、英米の哲学の動向を日本に紹介しないといけないとか、フェミニスト現象学だの、分析フェミニズムだの、新しい理論を日本に伝えないといけないとか、そういうお仕事ではなくて、遊び心と熱意、そして責任感をもって、戦争、性、ジェンダーの問題を、同性愛やクィアの議論を、モードを、水俣をかんがえる、などなど、まわりの評価に関係なく研究されたとおもうんです。そのような動きを決してたやしてはダメだとおもいます。だから、そういう遊びのある研究をすることがすごくだいじで、遊びだからやっぱり博打なんですよ。

さっきの2番目の質問に答えると、弁護士みたいに自分たちの味方になってくれるみたいな、そういう大学人像って、とても道具主義的な見方ですよ。もちろん、マイノリティにとって味方になってくれる大学人・研究者も必要ですが。大学院で研究することによって、世のなかを見返してやりたい、よくしたいっていうひと、結構いますよね。でも研究では、じぶんのかんがえや実践を認めてほしいとか、じゃなくて、むしろじぶんの実践を批判的に見つめ、対話することに意義がある。〈ともだち〉は、耳の痛いこともあえていいあうことのできる関係のはずです。社会の現場、コミュニ

ティの内部には、いろいろ矛盾やダメなことがある。それを管理者や検閲として禁止するのではなく、ダメ、やめとこう、と責任をもっていえる〈ともだち〉が必要です。

〈ともだち〉は学会と相性がよくない？

小西：臨床哲学は、ある意味、学会一般や、哲学の学会のあり方とか、哲学研究のあり方に異議申し立てをずっとしてきた場所でもあるかと思います。〈ともだち〉のあり方は、これらのあり方とは相性が悪いですし、矛盾していますよね。臨床哲学研究室が大学にある以上、そういった相性の悪いもの、矛盾したものとどこかで接点をもつことは避けられないと思います。研究者としての教員職にある以上、わたしは避けられないことだと思ってしまいます。そういうなかで、臨床哲学は研究とどう関わることができるのでしょうか。臨床哲学の実践には何ができるのでしょうか。

ほんま：単純に言えば、〈ともだち〉は制度をもたない、制度をはみ出ていく、ということにつきるとおもいます。ある共同体のウチとソトとを行き来する、ウチではチャランポランで信用ならない者として見られても、じつは、ソトの空気を運んでくれ、いざというときに頼りになる、でも主要人物にはならない。それが、よき〈ともだち〉としての哲学者のめざす姿だとおもっています。矛盾という漢字のなかの「盾」と「矛」は、闘うというルールにおける道具としては相容れないけれど、どちらもつかえる農業とか料理法とかをかんがえることはできます。片方で研究職、研究者というアイデンティティを持ちながら、研究や制度の有害さについて話をする。あえて矛盾するっていうのはおかしいんだけど、矛盾にみえる関係をかえていくのがだいじなのかなとおもいますね。だから、つきつめれば自身の生存も、他者の生存も、どちらにも部分的にコミットするという中間的なありかたを極めていくのがひとつの哲学者の生き方じゃないか。だから、哲学は特別な学問ではなくてだれもができるので、これを読んでいるみなさん全員が（哲学研究者じゃなく）哲学者だとおもってますけど、他人の人生に半分首を突っ込みつつ、ときには余計なこといいながら、ときにはじぶんをかえながら、それでも他人とともに生きようとするっていう、中途半端な生きかたとして、〈ともだち〉をとらえたいんです。

それが学会とか組織と非常に相性がよくないか、というと、わたしはいま、人生のおおくを大学にいて、留まりつづけてるんですが、そこを批判されることはない。もっと批判されてもいいとおもうんですけど。わたしは批判を承知でやってるんで。さっきいったことを大学のソトに出て、やめてからいうのはできますが、それはおもしろくない。そうしたら矛盾がなくなるわけじゃないですか。やっぱり、じぶんのなかに矛盾を抱えこみながら、大学人としてやらないといけないことやってるつもりです。場合によって矛盾するようなことを、大学のいち教員としてやることによって、大学そのものに常に新しい可能性を残しておきたい。鷺田さんたちが、大阪大学に臨床哲学をつくったとき、倫理学者たちから、どうして研究室という制度のなかにつくったのか、と批判を受けました。その批判の意味も理解できるのですが、でも、鷺田さん

はあえて矛盾した存在、つまり臨床哲学を大学にインストールしたんです。わたしがやめてしまって、ふつうの専門分野になってしまうと、その責任を放棄することになるので、わたし自身はそれですっきりするかもしれないけど、大学のためにならない。それはわたしの単なる自己満足じゃなくて、なぜか大学のソトのひとから、「やめないでください、あなたみたいなひとが大学にいることが希望になるので、やめないでくださいと」よくいわれます。

学会活動もしたらいいんだけど、学会に属しつつその活動に反することをあえてするような矛盾を抱えませんか、っていうことです。わたしは哲学系の学会はやめますけど、学会をやめる必要はない。（鷲田さんたちとはじめた「アートミーツケア学会」の共同代表をなぜかやっていますが、その学会のモットーは「学会らしくない学会」です。）そこでとどまり続けて、そのなかで、〈ともだち〉としての生きかたを放棄しない。いわゆる若手の研究者はどうですかね？ もともとやりたかったことをあきらめてしまっているひとはいないでしょうか？ あるいは別人格になっちゃって、学会のなかの人格と、「フィールド」のなかの人格を完全に使い分けてるひとがいたら、それはズルいだろうとおもいます。学会や研究会の席で、「それはおかしい」っていえる、それも研究者の立場ではなくて、〈ともだち〉として声を上げることができる。〈ともだち〉としてその場にいるからこそいえる。それは問題の当事者にいわせるのでもなく、代弁でもなく、あるいは研究の成果の一部というんじゃなくて、あくまでも個人として、〈ともだち〉として、「それはちがう」っていえる。その組織とか研究とかの内部の論理に生じる硬直性を防ぐためにも、〈ともだち〉ってすごいじだとおもうんです。それは研究上必要とか、理論的な矛盾を指摘するとか、倫理規範とか、そういう狭い話ではない。〈ともだち〉になるとは、そういう苦行でもありますね。

カテゴリーによって分断されない 〈ともだち〉

小西:そろそろ締めに向かいたいと思います。最後に、研究室内外のみなさんにメッセージをいただきたいです。現状の臨床哲学を踏まえて、何か臨床哲学という営みと関わることに對するアドバイスを 〈ともだち〉 と関係づける形でお願いします。

ほんま:臨床哲学は、創設以来、社会のなかの主流の立場とか主流の考えかたからずれたり、その周辺に追いやられたひとたちに関わることに関心をもってきたひとが、わたしも含めてすくなくない。最近、臨床哲学にかぎらず、じぶんの悩みを扱えるという期待をもって、研究にすすむひとがふえてきた、とかんじています。昔は、いわゆる支援者、看護師さんも含めて、理学療法士さんとか、現場におられるひとたちがじぶんの経験について整理したいという思いで、大学院に来られた。いまもそうなんですが、最近、時代の流れとしても、じぶんを研究したいひとすくなくないですよ。それはそれでいいとおもいます。ただし、じぶんの実存に直結していればいるほど、かんがえるのはむずかしくなりますよね、混乱もしますし。問題をじぶんのうちに抱えこめば抱えこむほど、同じような悩みを抱えているひとに、実際、関わりに

くくなります。じぶんを安全な場所に置きたい、じぶん自身に籠る場所を得たい、とおもうひとは、じつは研究に向いてないとおもいます。

やっぱり、そこでたいせつなのは、〈ともだち〉です。じぶんと同じではないけれど、ちかい悩みをもつひとたちはたくさんいます。じぶんと同じ悩みをもつひとの話聴くのは、じつは、すごく苦しい。わたしもそれなりにすごく苦しんできたので、気もちはわかります。わたしは、じぶんと同じ悩みをもつひとと関わるのを、20年くらい避けてきました。それくらい、直面することは怖いことだし、ムリすることはないとおもう。そのあいだ、わたしは何をしたかという、じぶんと似ているけどちがう悩みをもつひとたちと関わり続けてきたんですね。わたしは日本に住む日本国籍をもつものですが、日本に住む日本国籍をもたないひとや、外国にルーツをもつ人たちに、長期にわたって関わってきました。そのひとたちの話を聴くことによって、じぶんと共通する悩みをたくさん聴くことができ、すごく助けになりました。だから同じでなくても、共鳴できることがある。そこを聴くことで共鳴が起こると、こっちも理解がふかまるし、向こうもよく聴いてもらえたと、結果として、〈ともだち〉になれるんです。信頼関係もうまれる。ど真ん中じゃなくて、ちょっと離れた悩みのひとたちに関わるのはひとつです。ちょっとずらす。これができるようになると、今度はじぶんと同じ悩みをもつひとたちの間にも、じつは、いろんなちがいがあることが見えてきます。

ああ、ひとりひとりちがうし、答えはいろいろなんだ、大きくは、いっしょで、〈ともだち〉なんだけど、いろんなちがいがあって、そのいろんなちがいを社会の何がつくっているか、それを冷静にかんがえて研究すると、ここは精神障害のひとたちと、あそこは外国にルーツのあるひとたちと共通している、というようにいろんな補助線がひけるようになって、障害、国籍、人種、性別、性とか、そういう大きなカテゴリーに分断されない、たくさん〈ともだち〉の線ができるんですね。他者の悩みに関わることによって、じぶんの問題もちがう角度から見えるようになって、その問題を他の問題ときりはなしていたのは社会なんだ、と気づけるの研究の視点となるんです。一石二鳥でしょう。

小西：そうですね、今の話はわたしもすごく同意します。よく起こることとして、「同じ問題系」、たとえば「同じ精神障害」の当事者だとしても、まったく違う悩みや、ときに対立する考えが内在しているのに、自分事すぎる問題を自身の研究テーマにしたときに、そのような違いや対立が見えなくなる、あるいは、許せなくなるということがあります。実は、当事者とされるひとがその主題を研究するっていうことは、こういう難しさがあります。わたし自身は、当事性のある研究を絶対したいと思っているひとがいるとき、それを応援したいという気持ちもありますが、同時に、自分の核心中の核心の主題からは少し距離を置いて、直球ではない内容にコミットすることで視野を広く持てるようになるのではないかとも思っています。少し距離のあることを探求することによっても、自身の中核にアプローチすることだってできます。自分の悩みと同じ「ような」テーマを研究するというあり方もおすすめしたいところではあり

ます。

ほんま：臨床哲学は専門分野ではなくて、大学でなくてもいいんですが、研究や学問を更新していく運動とわたしは捉えています、今日お話しした〈ともだちになる〉は、重要な要素のひとつで、それだけではないんですけど、知のありかたを根本的に変えようとおもっています。基本的に知識は、「対象化」という有用ではあるけれど、関係を切る作業に向かってしまう。そうした調査とか対象化とはちがった、〈ともだちになる〉、〈ともだち〉といっしょに、あることをみる、その三角関係、三項関係をむすぶ知恵がある。だから、フィロソフィは、知恵の友なんですね。〈知恵〉と〈ともだち〉とわたし。わたしが知識を愛するのではなく、まず、〈ともだちになる〉ことがさきにある、〈ともだち〉の知恵をまなびながら、〈ともだち〉といっしょにその知恵を眺める、ふれる。そういう生きかたができるとおもうんです。音楽もそうです。わたしの先生は音楽の〈ともだち〉で、その知恵を、先生とともにまなんでいく。そこから、学問をやり直せるはず。本来、あらゆる学芸はそうあるべきじゃないでしょうか。

知恵は決してじぶんのものじゃなくて、所有できない。優先権とか、著作権とか、新規性とか、対象知をめぐる愚かな競争ではないでしょうか。一刻も早く、そういった愚かなゲームからおりのべきです。近年、研究者も、「〇〇倫理」にすごく縛られているじゃないですか。私有化し、対象化する研究は、わたしたちの関係を切って、競合させて、対立させるばかりで、つながるちからがどんどん失われている。研究者と非研究者の分断もそうです。臨床哲学は大学だけじゃなくて、みなさんの生きてる現場でもできる。卒業して続けるもよし、大学に入らなくても、この話を読んでやってみようとおもうひとはやってみればいいし、実践可能だとおもいます。〈ともだちになる〉ってというのは、おそらく人類最古の知恵じゃないでしょうか。

小西：ありがとうございました。

(ほんま・なほ、こにし・まりこ)